

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.160

2006年9月

名古屋大学オープンキャンパスを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
名古屋大学オープンキャンパスを開催	3
松田科学技術政策担当大臣が本学を視察	4
第13回高等研究院セミナーを開催	5
伊藤忠商事株式会社と産学連携協定を締結	6
「ファミリーマート名古屋大学店」オープンセレモニーが挙行される	7
「2006あいち男女共同参画社会連携・産学官連携フォーラム 連続公開講座」を開催	8
「第17回日本数学コンクール・第10回日本ジュニア数学コンクール」を開催	9
平野総長が韓国のテレビ放送局のインタビューを受ける	10
モンゴル国立大学と学術交流協定を締結	10
平成18年度新規採用職員フォローアップ研修を開催	11
平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択される	11
平野総長がアイソトープ総合センターX線実習施設を視察	12
●オフタイム	
薪割りとストーブ	13
杉浦 康夫（病院・施設整備・環境安全関係担当理事／副総長）	
●知の先端	
乱流の計算科学 金田 行雄（大学院工学研究科教授／高等研究院教員）	14
●教育のデザインとプラクティス	
持続可能な地域づくりへの思いを引き継ぐー環境行政・NPO 実践セミナー	16
高野 雅夫（大学院環境学研究科助教授）	
●知の未来へー若手研究者の紹介	
非線形の泥沼から 津川 光太郎（大学院多元数理科学研究科助教授）	18
●学生の元気	
FeedForth 2006: 大学院生主催の学際学会に向けて Feedforth06実行委員会	19
●部局ニュース	
文学研究科が外部評価ピア・レビュー委員会を開催	20
文学部が木浦大学校夏期日本語研修生を受け入れる	20
工学部が「テクノサイエンスセミナー」を開催	21
工学部が「テクノフロンティアセミナー」を開催	21
「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」を開催	22
遺伝子・再生医療センターが ISO の認証をダブル取得	22
公開講演会「オーロラの科学 オーロラの発生の謎にせまる」を開催	23
六本木や秋葉原に「ドライミスト」を設置	23
キャリアガイダンスセミナーを開催	24
公開講座「数学アゴラ」夏季集中コースを開催	24
グランパスフラッグフットボール1日体験教室を開催	25
公開実験講座2006「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を開催	25
地域貢献特別支援事業「都市郊外の農業教育公園」第3回講演会を開催	26
農業ふれあい教室「カイコを育て見る」を開催	26
第47回東海・近畿地域大学附属農場協議会を開催	26
第22回オープンレクチャーを開催	27
博物館が第58回特別講演会を開催	27
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年7月16日～8月15日	28
●附属図書館からのお知らせ	
2006年秋季特別展	32
「江戸時代の村と地域ー美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害ー」	
●INFORMATION	
名古屋大学ホームカミング日を9月30日（土）に開催	33
●イベントカレンダー	34
●ちょっと名大史	
航空医学から宇宙医学へ	36

名古屋大学オープンキャンパスを開催





本学では、大学進学希望者に対し、教育・研究の特色の紹介や施設見学を通じて本学への進学の目的意識を持ってもらうため、例年オープンキャンパスを企画しています。

今年度は、8月9日（水）から11日（金）の3日間、開催されました。初日の前日には、台風7号の東海地方接近により開催が危ぶまれましたが、当日には台風の進路が逸れるという幸運にも恵まれ、3日間とも予定どおり開催することができました。

午前中、豊田講堂で行われた全体説明では、平野総長のあいさつ、杉山副総長による大学概要等の説明、大学紹介DVDの上映が行われました。午後からの学部説明会では、各学部会場を移し、学部長はじめ教員・学生・事務職員が一体となり、趣向を凝らした学部説明、模擬講義、施設見学等が行われました。各会場では、教員や在学生と直接懇談したり、自分の進路等について詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取ったりする高校生の姿が見られ、熱気にあふれ、終日キャンパスは多くの高校生で賑わいました。

オープンキャンパスの参加者は、3日間を通して6,647名（9日：教育・法・経済・農の各学部対象で2,156名、10日：文・理・医の各学部対象で2,290名、11日：経済及び工学部対象で2,201

名）あり、昨年より2,000名ほど参加希望者が増えたため、各学部では教室の変更等を急遽行うなどのハプニングもありましたが、無事終了しました。



	2
1	3
	4

- 1 会場の様子
- 2 全体説明
- 3 農学部施設見学
- 4 法学部紹介

松田科学技術政策担当大臣が本学を視察

松田岩夫科学技術政策担当大臣が、8月7日（月）、本学を訪問し、学内を視察しました。

まず、本部1号館第2会議室において、平野総長、各理事、副総長から、名古屋大学プロフィール等広報誌の紹介及び本学の概要について説明がありました。

その後、大臣一行は、物質科学国際研究センターを訪れ、野依本学特別教授のノーベル化学賞受賞を紹介するケミストリーギャラリーなどを視察しました。巽センター長から、物質創造研究の国際的研究拠点である同センターが京都大学や九州大学と共同で推進する「物質合成研究拠点機関連携事業」や、若手人材育成のための「日独共同大学院プログラム」、化学研究の最新の研究成果について報告を受けました。さらに、有機合成実験研究室を訪れ、野依特別教授らの触媒研究の新たな展開について北村雅人同センター教授より説明を受けました。松田大臣は、センターの活動が新たなイノベーションへと発展することと、若手人材育成の取り組みへの強い期待感を表しました。

次に、IB電子情報館に移動した一行は、同館南館3階会議室において、平成18年度文部科学省科学技術振興調整費新規課題（先端融合領域イノベーション創出拠点）に採択された研究、「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」について、本多裕之工学研究科教授、末永康仁情報科学研究科教授、森 健策同研究科助教授より、プロジェクターや模型を使った詳細な説明や研究成果の報告を受けました。同研究は、超高齢化社会の到来に伴い、従来の予防医学を越えた新しい概念としての“個の予防早期医療の確立”を目指すものです。松田大臣は担当教員の説明に対し、このような研究に各大学が連携して取り組むとともに、全国の大学病院のデータに関する統一情報システムを構築することが重要である旨述べ、今後の本学の研究成果に期待を寄せました。



野依特別教授のノーベル化学賞受賞メダルを見る松田大臣

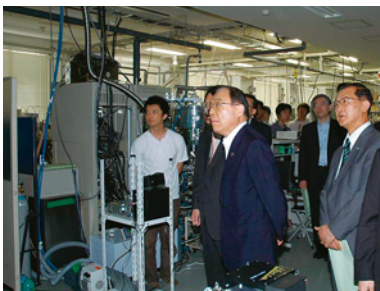
引き続き、一行は同館西館3階において、文部科学省の実施する知的クラスター創成事業に選定された、愛知・名古屋地域の「ナノアセンブリングシステム開発」及びプラズマナノテクノロジーに関する研究について、堀 勝工学研究科教授より説明を受けながら、実験設備を視察しました。同事業は、産・学・官が一体となり、ナノテクノロジーによる新機能の付与や精度の向上をベースにして、ものづくりの高付加価値化と環境負担の低減を両立した「ナノテクを利用した環境にやさしいものづくり」の実現を目指すものです。松田大臣は、実験中の学生たちに気さくに話しかけ、未来の研究者にエールを送りました。

施設の視察後は、本部1号館第2会議室に戻り、総長、各理事、副総長及び優れた業績をあげた女性科学者に贈られる「猿橋賞」を今年5月に受賞した、森 郁恵理学研究科教授とともに、懇談をしました。

松田大臣は、今回の本学への視察を振り返り、「大学で培っている科学技術を社会に還元するため、研究に励んでほしい。名大からイノベーションが起こることを大いに期待する。」と、本学への激励を述べました。



IB電子情報館での研究紹介の様子



実験装置を見学する松田大臣



記念撮影

第13回高等研究院セミナーを開催



後藤元同院教員による研究報告の様子

第13回高等研究院セミナーが、7月25日（火）、高等総合研究館カンファレンスホールにおいて、本学の教職員・学生・一般市民など、約50名の参加を得て開催されました。

このセミナーは、同院教員（研究プロジェクト採択者）を話題提供者として、採択プロジェクトの研究成果を一般の方々にも理解しやすいよう紹介するものであり、学内外の方々との知的交流の促進、また、本学の代表的な研究活動の一端を社会に発信・還元するための礎を築くため、平成15年7月から年間4回程度開催しています。今回が13回目の開催となり、現在まで26名の教員が話題提供者となりました。

セミナーは、奥村隆平同院副院長によるあいさつ及び話題提供者の紹介の後、石浦正寛同院教員（遺伝子実験施設教授）による「生物時計分子装置の作動原理の原子レベルでの解明に向けて」、後藤節子元同院教員（医学部保健学科教授）による「周産期女性のマタニティ・ブルーズ及び産後うつ病に関する文理複合的研究」の2つの研究報告がありました。また、参加者からは、いろいろな質問があり、予定時間を超える盛り上がりを見せていました。

セミナーに引き続いて行われた懇親会では、話題提供者に加えて、学内から様々な分野の研究者等が参加し、専門分野を超えて活発な議論がされました。

なお、平成18年度のセミナーについては、9月26日（火）に、吉村 崇生命農学研究科助教授、水谷 孝工学研究科教授を、1月23日（火）に、魚住信之生物機能開発利用研究センター教授、松澤和宏文学研究科教授を話題提供者として開催する予定です。



石浦同院教員による研究報告の様子

伊藤忠商事株式会社と産学連携協定を締結

7月24日（月）、本部1号館第2会議室において、平野総長、宮田副総長、小林栄三伊藤忠商事株式会社代表取締役社長及び太田徹同常務執行役員名古屋支社長列席のもと、産学連携協定締結の調印式が挙行されました。

調印式では、平野総長及び小林社長があいさつの後、協定書に調印し、産学連携協定が交わされました。

本協定は、相互に情報交換することにより産業界との連携を強化し、本学における研究成果を広く社会へ還元するために締結されたもので、同社が所有する国内外の幅広いネットワーク、開発企画力、提携研究機関、関係取引先企業、情報収集力等を活用する事が、本学の推進する産学官連携政策と合致し、また、同社にとっても自治体・大学等との共同取組施策を推進していることから合意に至ったものです。大学と企業双方が組織として積極的に交流の場を提供し、連携を図るという形で産学連携を目指すため、学内の複数の研究者や研究組織が関わることになり、今まで以上に高いレベルでの共同研究や学際的・複合的領域の研究が可能となると思われます。

同社は、本社に先端技術戦略室を置き、ナノテクノロジー



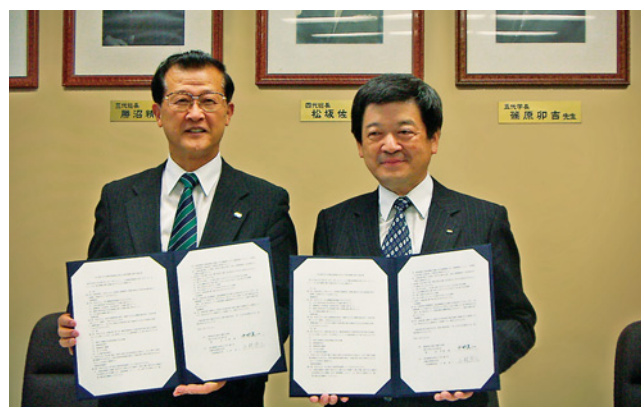
左から、宮田副総長、平野総長、小林伊藤忠商事株式会社代表取締役社長、太田同常務執行役員名古屋支社長

一、バイオテクノロジーや、新検査方法、新加工法などの開発に力を入れており、産業技術総合研究所、理化学研究所等の研究機関と提携するとともに、自治体、との提携や中小企業支援を積極的に推進しており、これらの提携関係を活用し、研究機関と中小企業の技術移転仲介、共同開発等を行ってきました。今回、本学と産学連携協定を締結したことにより、新しい研究開発を行う事による地域への貢献、医学部との共同研究による地域医療への貢献を目指しています。

本協定に基づく具体的な研究開発については、国内の大学の中でも特に医工連携に力を入れている本学として、メディカルデバイスの開発やナノバイオに関する研究における共同研究等を実施し、医療分野での貢献を図っていく予定です。また、機能的食品・化粧品素材開発、先端医療・健康ビジネスに関する開発、エネルギー・環境ビジネスにおける開発、生物系新素材開発、医工連携のバイオデバイス開発、大学発ベンチャー企業との協力、中小企業における新技術との融合などの可能性があり、今後の動きが期待されます。



握手を交わす平野総長と小林社長



協定書を披露する平野総長と小林社長

「ファミリーマート名古屋大学店」オープンセレモニーが 挙行される



あいさつする平野総長

7月24日（月）、東山地区全学教育棟前において、株式会社ファミリーマートによるコンビニエンスストアのオープンセレモニーが挙行されました。

同店のオープンにあたっては、旧文科系自動車車庫のスペースを学生、教職員の福利厚生施設として有効利用し、民間の力を借りてコンビニエンスストア等の新規事業を展開することについて、学内に広く意見を求めた結果、コンビニエンスストアの設置が決定し、同運営事業者を公募して、厳正に審査をしたところ、株式会社ファミリーマートが同運営事業者として選定されました。同店は、同社が店舗用として本学の土地、建物を増改築したものを寄附いただいたもので、賃貸借契約により同社に貸与する形をとっています。

セレモニーでは、まず、上田準二株式会社ファミリーマート代表取締役社長、平野総長のあいさつ及び来賓である小林栄三伊藤忠商事株式会社代表取締役社長による祝辞がありました。続いて、東海第2ディストリクト名古屋東エリアの宮崎良明マネージャーより同店を開店する上での決意表明、ストアスタッフによる接客用語唱和のパフォーマンスが行われました。宮枝同店店長の発声に合わせ、

「いらっしゃいませ。」「ありがとうございました。」等の基本接客用語を大きな声で元気よく唱和するストアスタッフに、式典参加者からは拍手が送られました。最後に、平野総長、杉浦理事、上田社長、小林社長等によるテープカットが行われ、セレモニーは無事終了しました。

終了後、店内の見学が行われ、式典参加者は思い思いに買いものを楽しみました。

店内は、プレゼンテーションや発表などに適したスクリーン等を備えた多目的に利用できるマルチスタディールーム（5㎡）や、5台のパソコンが設置されたイトインコーナーが配備されており、学習の場及び、憩いの場としての利用が可能です。また、弁当、飲料、日用品、雑誌などのコンビニエンスストア商品や、各種公共料金の代行サービス、マルチメディア端末によるチケット販売、銀行ATMの設置など各種サービスが得られます。

学生、教職員の福利厚生のみならず、同店を通して、商品の流通、物流、情報システム等についての「生きた」データを収集し、教育・研究に役立てることが可能であり、産学連携として今後の発展が期待されます。



テープカットの様子



左から、上田株式会社ファミリーマート代表取締役社長、平野総長、小林伊藤忠商事株式会社代表取締役社長

「2006あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム 連続公開講座」を開催

7月31日（月）から8月2日（水）の3日間、野依記念 学術交流館を主な会場として、「2006あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム 連続公開講座～少子高齢化の今 男女がともに輝く社会をめざして～」が開催されました。愛知県、名古屋市、愛知県経営者協会、連合愛知及び本学を会員として2004年8月に発足した、「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」の主催で、3日間に6つの講座が連続して開催され、延べ836名の参加がありました。

初日は、公開講座Ⅰ「私たちの仕事と子育て～どうやって両立するか？何が必要か？～」と題し、独立行政法人経済産業研究所総務副ディレクターである山田正人氏とニッセイ基礎研究所主任研究員である土堤内昭雄氏による自身の子育て体験を中心とした講演と、永井暁子東京大学社会科学研究所助教授による家族社会学の観点からの講演が行われ、その後、田村哲樹本学法学研究科助教授をコーディネーターとして、パネルディスカッションが行われました。

2日目は、公開講座ⅡからⅤまでの4講座が開催されました。公開講座Ⅱでは、「次世代育成支援と働き方の見直しに向けて」と題し、吉田良生朝日大学教授、愛知労働局職員による講演や、株式会社丸栄、株式会社ポッカコーポレーションの実務者より企業の取り組みについての事例発表がありました。女子学生を対象とした公開講座Ⅲは、「女性のためのキャリアデザイン」と題し、キャリアアドバイザーである上本裕子氏の講演や、現役の名古屋市女性職員によるパネルディスカッションがありました。公開講座Ⅳでは、「女性社員を部下に持つ中間管理職講座」と題し、平松和子平松労務事務所所長による講演と、株式会社INAX、河村電器産業株式会社及び株式会社ポッカコーポレーションの実務者によるパネルディスカッションが行われました。また、会場を移し、ウィルあいちで行われた公開講座Ⅴ「楽しみながら学ぶ男女平等」では、落語家の桂 文也氏が講演と落語で会場を沸かせました。



講演する山田氏（公開講座Ⅰにて）



講演する住田氏（公開講座Ⅵにて）

最終日の8月2日（水）には、稲垣愛知県副知事及び平野総長のあいさつに続いて、公開講座Ⅵが開催され、テレビ番組等で活躍している弁護士で内閣府男女共同参画会議議員でもある住田裕子氏が「あなたもチャレンジ 男女がともに輝く社会をめざして」と題した基調講演を行いました。住田氏の軽快な話しぶりに、会場全体が引き込まれていました。その後、パネリストとして、佐藤祈美愛知県県民生活部男女共同参画室長、光田清美名古屋市総務局男女平等参画推進室長、柴山忠範愛知県経営者協会専務理事兼事務局長、塩谷和宏連合愛知副事務局長、東村博子本学男女共同参画室長を迎え、金井篤子本学教育発達科学研究科教授をコーディネーターとしてパネルディスカッションを行い、連続公開講座を締めくくりました。

学内外から非常に多くの来場者があり、男女共同参画への理解を深める上で、大変有意義な3日間になりました。

「第17回日本数学コンクール・第10回日本ジュニア数学コンクール」を開催

第17回日本数学コンクール及び第10回日本ジュニア数学コンクールが、8月13日（日）、本学経済学部を会場として開催されました。

同コンクールは愛知、岐阜、三重の大学、高校、中学の先生によるボランティア組織を母体として1990年に始められ、例年夏休みの時期に開催しているものです。1997年からは、高校生を対象とする日本数学コンクールと、中学生を対象とする日本ジュニア数学コンクールに分けて行っています。昨年からは、三重（津高校・四日市高校）と大阪（清風高校）の他に、関東地区からの応募者に配慮して東京会場を設定しており、今年は東京大学大学院数理科学研究科（駒場第1キャンパス）会場を含めた全5ヶ所で、東海3県の高校教諭等の協力を得て開催され、小学4年生から高校3年生までの総勢266名が、愛知県下はもとより東は埼玉県、西は広島県から参加しました。日頃授業で解く問題とは違ったユニークな問題に挑戦した参加者からは、「問題は難しかったが、解き方をひらめいたり、発見したときに喜びを感じた」、「数“学”というより数“楽”という感じで楽しかった」、「真剣に考えたことにより、数学への興味が広がった」といった、嬉しい感想が数多く寄せられました。

なお、優秀な学生に対する表彰及び今回の問題解説を、11月3日（金）、本学シンポジオンホールにおいて行う予定です。

◆出題問題◆

- [シニア] 問題1「チョコボール詰め」
 問題2「ランキング」
 問題3「鬼ごっこ」
 [ジュニア] 問題1「チョコボール詰め」
 問題2「地図の塗り絵」
 問題3「写真拡大」



会場へ向かう参加者



真剣に問題と取り組む参加者の様子



会場の様子

問題1.「チョコボール詰め」

直径が3cmの球形をしたチョコレートを銀紙で包み、箱に詰めてセットで売ることにしました。持ち運びに便利のように、なるべく容積の小さい箱を作りたいと思います。また箱の形を単純にするため、三角柱、三角錐、四角柱、または四角錐のどれかの形を使いたいと思います。このとき

1. 10個入りの箱はどんな形が良いでしょう
2. 9個入りではどうでしょう
3. いろんな個数について、最も適した形を求めてください。

※他の問題については、日本数学コンクールの広場 (<http://www10.plala.or.jp/mathcontest/>) で紹介されています。

平野総長が韓国のテレビ放送局のインタビューを受ける

8月2日（水）、本部1号館において、韓国のテレビ局大邱MBC文化放送による平野総長へのインタビューが行われました。今回のインタビューは、同局が創立43周年を記念して、韓国大邱市と京北県が経済連携を推進している現状を取り上げ、海外の先進的な事例をシリーズで紹介する特別番組を制作するため、市や県の行政の枠を越えた



インタビューの様子

経済連携を先進的に行っている東海地方の基幹大学としての本学に地域経済に果たす役割等について取材の申込みがあったものです。

総長はインタビューの中で、自身が協議会のメンバーを務める、中部経済産業局を主体とした、県、市、産業界、大学、研究機関が一体となって国際的産業交流を促進する活動“グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ”にふれ、地域の人々が幸せになるために、市や県といった行政単位にこだわらず、同じ経済、文化圏の産官学が協力して地域の特性をアピールしていくことが大切、と話しました。

本インタビューの様子は、8月7日（月）から5日間にわたり放映された、韓国大邱MBC文化放送の企画ニュース「“統合の時代”われわれの選択は？」の中で、紹介されました。

モンゴル国立大学と学術交流協定を締結

7月20日（木）、本部1号館において、モンゴル国立大学との学術交流協定式が行われ、平野総長とTs. ガンツォグ モンゴル国立大学学長が学術交流協定書に署名し、同協定を締結しました。この締結は、平野総長がモンゴルを訪問した2005年8月から1年間の準備期間を経て、実現したものです。



記念撮影

モンゴル国立大学は、1942年に設立され、現在400名の職員と3,200名の学生を擁する大学で、本学との交流は、本学法学研究科教員がモンゴルを訪問し、体制移行期の法改革に関する共同研究を始めた1994年以来、続いています。2000年4月には、本学大学院法学研究科と同大学法学部間で学術交流協定が締結され、また、大学院国際開発研究科、大学院医学系研究科、大学院環境学研究科、博物館においても交流が行われており、全学で24名の留学生在籍しています。

本学のモンゴル研究は、様々な分野の研究者交流により、複合的に推進しており、全学的な協力で研究が進んでいる点において、学内でもユニークな存在です。特に、法学分野においては、文部科学省平成18年度大学教育国際化推進プログラムにより、各々の学生が互いの国の制度、法律について指導し学びあう双方向の学生交流を行っています。今年9月には、文部科学省特別教育研究経費により、同大学内に本学日本法教育研究センターが開設される予定です。

今回の締結により、本学はモンゴルに拠点を持つ日本でも唯一の大学として、現地に根付いた研究・教育の交流を進め、日本におけるモンゴル研究・交流の中心的な機関となることが期待されています。

平成18年度新規採用職員フォローアップ研修を開催

平成18年新規採用職員フォローアップ研修が、7月14日(金)、豊田講堂第1会議室において、開催されました。

この研修は、本学に新規採用された後、3～6ヶ月以内の職員を対象に、法人職員として必要な業務を遂行するための基礎知識の再確認、能力の開発及び養成を図ることを目的として毎年実施しているもので、今回は21名が対象となりました。

研修では、株式会社エ・ム・ズの秋田稲美講師により、

上司・同僚・部下間のコミュニケーション術や、昨今世間で話題になっているコミュニケーションスキルである「コーチング」についての講義がありました。

その後、3つのグループに別れて、先輩職員との懇談が行われました。本学で勤務を始めてから現在までの間に疑問に思ったこと、また、今後の目標などについて、先輩職員を進行役に、和やかな雰囲気の中、意見交換が行われ、参加した新規採用職員にとって大変有意義な研修となりました。



講義の様子



先輩職員との意見交換会

平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択される

文部科学省において公募されていた「平成18年度『魅力ある大学院教育』イニシアティブ」が選定され、本学から下記のとおり2件の事業が採択されました。

本事業は、意欲的・独創的な研究者養成の優れた大学院教育プログラムを、重点的に支援を行うことにより、大学院教育の実質化を推進するとともに、採択された取り組みを広く社会に情報発信することで、今後の大学院教育の改善を活用することを目的として、昨年度から開始されたものです。

今年度は、国公立129大学から申請のあった268件中、人社系16件、理工農系19件、医療系11件が採択されました。

【人社系】

教育プログラム名：

人文学フィールドワーカー養成プログラム

主たる研究科・専攻名：

大学院文学研究科人文学専攻

取組実施担当者：

周藤 芳幸教授

教育プログラム名：

社会環境学教育カリキュラムの構築

主たる研究科・専攻名：

大学院環境学研究科社会環境学専攻

取組実施担当者：

溝口 常俊教授

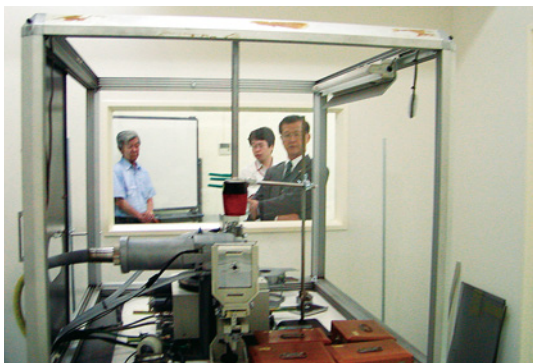
平野総長がアイソトープ総合センター X線実習施設を視察

7月20日（木）、平野総長が、成瀬研究協力・国際部長、細野施設管理部施設整備課長とともに、共同教育研究施設に新たに設置されたアイソトープ総合センターのX線実習施設を視察しました。7月12日（水）には、山本理事も同施設を視察しました。

同施設は、4部屋（1号館1階の107号室、109号室、131号室、133号室）を、X線実習用に改修・整備した全国初の施設です。

平野総長らは、はじめに、西澤アイソトープ総合センター長から施設の概要説明を受け、柴田理尋同センター助教授の案内で各部屋を視察しました。

この施設では、特殊な遮蔽設備と大線量から小線量までのX線を検出するための各種測定器を備えており、X線発生装置の安全性と危険性の両面を理解することを目的として、漏洩放射線の測定など、X線の安全取扱いに関する実習を行います。



X線装置を見学する平野総長



視察する山本理事

薪割りとストーブ

理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）／副総長
杉浦 康夫

一刀の下、薪を割る爽快感はこたえられない。

ワークオフは何をするのか、夏は山か海か、冬は炬燵かスキーか、若い頃のセレクションは多彩である。学生時代には部活として能もやり、バスケットもやり、いつも体を動かしていた。それから35年近く経つと、何が趣味かと言われ、はたと迷ってしまう。

北関東と、東北に住み、田舎家にあこがれ続け、15年ぶりに戻った名古屋の自宅に囲炉裏までセットした。5-6年前、久しぶりに名古屋の猛暑を経験した。暑さがこんなに大変だったことを忘れていた。「夏生きてゆけるところを探さねば」と受験生の娘を留守番において、愛知、岐阜、三重、長野の涼しそうなところを走り続けた。古い家での田舎暮らしもいと想い、東海三県をさ迷っていた。

たまたま、訪れた木曽福島で昔、子供達が幼い頃遊んでいたロッジを見つけ此所がいいと思いこみ、そこにあった古家を山荘とした。古家だけに冬はしんと冷え、いろいろ手を加えたが、今ひとつと思いつながらも、木を切り、蕎麦を食べ、名古屋ではできない生活をそれなりに3年間楽しんで過ごした。

ある日、薪ストーブが冬山の厳冬も過ごせる暖かさがあることを知り、是非ストーブを置きたいと考えた。しかし古家では薪ストーブの重さには耐えられないことがわかり、頑丈な丸太小屋を造ることにした。

丸太小屋の薪ストーブは冬にも耐えられる暖かさを与えてくれた。どんなに寒いときでも暖かく

過ごせ、薪の燃える赤い炎を見つつ、暖まりながら飲む酒は至福の時。そのために夏はとにかくせっせと薪を作ることが大事で、夏はアリさんとなって薪割りに励み、冬はキリギリスになって酒と暖にひとりのんびりとする。

ワークオフでは、いかに現実のスケジュールに追われる生活から離れられるか、離れることによってまた次の仕事へのエネルギーが作られるのが一番重要なことかもしれない。若い頃は気にもとめず、体力で勝負していたが、この年令になり、日常と違う生活を週末に過ごすことで、いかに切り替えが大切であるか知るようになった。これからも夏はアリさんで、薪を割り、冬はストーブでワインを飲み次のエネルギーを作ってゆきたい。

最近、一足早い山の秋が近づき、キリギリス志向の妻も、にわかアリさんになって薪運びに精を出している。



ワインとストーブはいつでも赤い炎を用意してくれる。

乱流の計算科学

金田 行雄 大学院工学研究科教授／高等研究院教員

流れはいつでもどこにもある現象です。コーヒーに注いだミルク、飛行機・自動車・建物のまわりの流れ、津波、竜巻、太陽風、星雲の動き、…、身の回りから宇宙スケールに至るまでいたるところに流れがあります（図1）。呼吸にも血流にもひとときも休みなく流れがあり、意識するしないにかかわらず、我々は流れに囲まれて暮らしています。その流れには、整っていて層をなすような流れ＝層流と不規則で乱れた流れ＝乱流の二つがあります。日常的に観察する流れはほとんどが乱流で、乱流はごくありふれた現象です。

にもかかわらず、乱流は未解決の難問として知られています。量子力学の創始者の一人

W. ハイゼンベルクは天に召されるとき、「神にお会いするとき、二つの質問をしたい。ひとつは Why relativity? もうひとつは Why turbulence? 前者については、神は答えをお持ちになるであろうと私は信じる。」と述べたとされています。乱流は自然の認識に関わる原理的でチャレンジングな課題であるだけでなく、一方でまたその解決が、気象予測、環境・エネルギー問題や航空機・自動車の設計などに関わって実应用到に直結するという特徴を持っています。

乱流の難しさの原因のひとつに、ゆらめく陽炎や炎に見られるように時々刻々変化する流れの時間的空間的構造があまりに複雑なことがあります

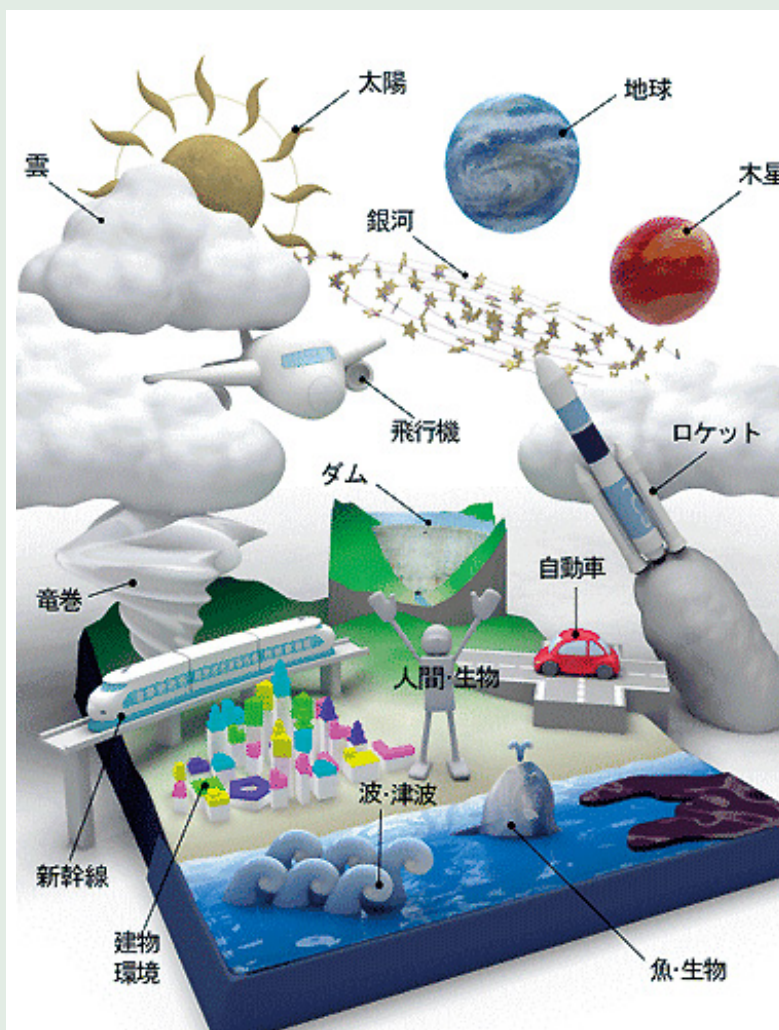


図1

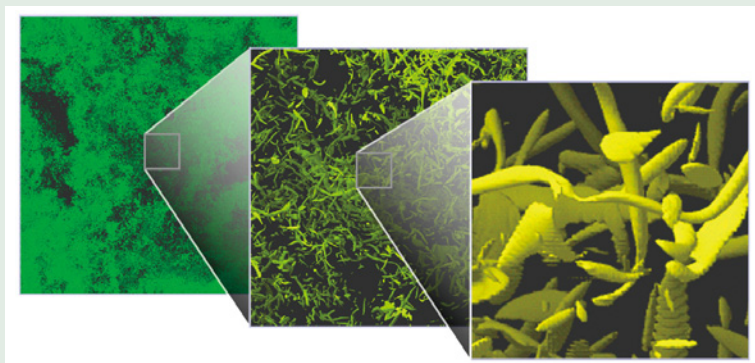


図2 数値シミュレーションによる乱流中の広いスケールにわたる渦構造（渦度の強いところ）の可視化例。右側の図は左側の図の拡大図。

す。このため、乱流の解析には極めて多くの変数（これを自由度と言います）を扱う必要があります。多くの自由度を持つ系を扱う学問のお手本として熱・統計力学があります。そこではアボガドロ個（ $\sim 6 \times 10^{23}$ ）の分子の運動を個々に追わなくても圧力や温度など小数の変数によってその系の記述ができることが知られていますが、一方、乱流ではこのような関係は知られておらず、そもそもそのような関係や変数の存在自体も分かっていません。

このような困難に立ち向かう方法として期待がもたれているものに計算科学的方法があります。とくに、近年のコンピュータのハード、ソフト両面の著しい発展はこれまで困難であった、乱流の特徴であるところの自由度の多さに直接立ち向かうことを可能にしつつあります。実際、我々は並列計算の専門家との協力の下に最近地球シミュレータを用いて従来の512倍の約2700億の自由度をもつ世界最大規模の乱流直接数値シミュレーション（DNS）を行うことができました。そのDNS

によって、きわめて広いスケールにわたる大小さまざまな構造をまるごと捕らえられるようになり、乱流中に驚くほど微細な構造が隠されていることがわかりました（図2）。現在我々はそのDNSデータの解析を進めています。これまでさまざまな分野で乱流とは無関係な現象、たとえば株価変動などに、乱流の持つ統計性との類似があることが知られています。社会変動などと違い、乱流DNSには我々のコントロール下で詳細なデータが得られると言う利点があります。乱流の知見はこのような乱流以外の現象の理解をも深めると期待されます。

50年以上も前にフォン・ノイマンはある報告の中で数学的方法による乱流研究の難しさを述べた後、「これらの条件下では extensive な、ただし、よく計画された計算科学的な方法による break the dead lock に希望がもたれる」と述べています。いま、この50年来のフォン・ノイマンの夢に手が届く段階になったのではないかと考えています。

昭和51年東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了、理学博士。
現在 工学研究科教授、名古屋大学高等研究院教員、21世紀 COE 「計算科学フロンティア」リーダー。
専門分野は流体力学、とくに乱流の統計理論と計算科学。

かねだ ゆきお



持続可能な地域づくりへの思いを引き継ぐ

—環境行政・NPO 実践セミナー—

高野 雅夫 大学院環境学研究科助教授

「再生不可能な資源は使えば使うほど減っていき、やがては枯渇する。『やさしさ』は使えば使うほど増大する無尽蔵のエネルギーである。将来、化石燃料の枯渇により、より苦しい生活を強いられることが予想されるが、『やさしさ』はその時人々の原動力になる。」

これは環境行政・NPO 実践セミナーに参加した大学院生のレポートの一節です。この授業で私が伝えたかったことや学んで欲しかったことで、私がうまく言葉にできなかったことをみごとに美しく力強く表現してくれました。

現在の日本社会はおおきな曲がり角にさしかかっています。明治以降、100年間に渡って続いた「右肩上がり」の成長型社会が終焉し、これからは「右肩下がり」の時代に入ろうとしています。社会のすべての領域で真の「構造改革」が必要になっているといえるでしょう。

地域社会の公的部門はその先鋭的な分野です。「右肩上がり」のなかで、いなかの過疎化と都市の中心市街地の衰退がすすみ、地域経済は公共事業に過度に依存するようになってしまいました。役所の意識も住民の意識も、国からいかにオカネをとってくるか、ということに関心が集中します。しかしその結果、国の財政は破綻状態となりました。この10年は本格的な行政部門の「リストラ」の時代となるでしょう。

行政「リストラ」とともにそれに下支えされていた地域経済と地域社会が崩壊するリスクが日本全国津々浦々で高まっています。国からおちてくるオカネを待っているのではなく、地域にどのような資源と問題があるのかを把握し、資源を活用して問題を解決するとりくみが必要となってきます。私はこのような取り組みを自立した持続可能な地域づくりと呼んでいます。



各地のNPOや自治体を訪問して地域づくりのキーパーソンからその思いを引き継ぐ学生たち。

環境学研究科では修士課程の学生の1割ほどが公務員として巣立っていきます。また、これからはNPO職員となったりNPOを立ち上げたりする卒業生も増えていくでしょう。しかしながら、今日求められる課題にとりくむための考え方やスキルを学ぶ場はこれまでありませんでした。そこで、この授業では、公務員などを志望する学生をターゲットに、自立した持続可能な地域づくりがなぜ必要とされ、それはどのようなものを学ぶことをねらいとしました。

この授業ではまず、従来の行政がどのような仕事をしてきたかを特定の自治体の職員になったつもりでロールプレイングによって学んだあと、自立した持続可能な地域づくりとはどのような課題かについて、私が持続性学の立場から理論的な背景を講義します。その上で、現実に学んでもらいます。つまり、いくつかのグループに分かれて実際にそのような地域づくりが行われている現場に訪問調査に行き、そこでどのような取り組みがなされているかを調べてもらうわけです。

どこに調査に行くかは学生たちがインターネットなどで調べて選びます。中部地方でも各地で意欲的な地域づくりが進められています。そのような自治体やNPOにコンタクトをとります。そのためのメールの書き方から指導します。

今年度、学生たちは愛知県田原市のエコガーデンシティ構想と愛知県阿久比町の福祉NPO法人「もやい」を選びました。

田原市は遊休農地に菜の花を植え、これから食用油を生産し、その使用後の廃油を自動車燃料に再生する菜の花エコプロジェクトを中心に、太陽光発電や風力発電の推進などをおこなった総合的なまちづくりに取り組んでいます。遊休農地とい

う「問題」を「資源」にかえて持続可能な地域をつくろうとする取り組みです。

訪問調査では市役所と協働しながら菜の花プロジェクトをすすめるNPOの方とお話することができました。この方は農家で遊休農地が広がることに心を痛めていたところに菜の花プロジェクトの話を知り、自分たちもやってみよう、ということを取り組みをはじめたといいます。ある時点から行政の積極的なサポートが得られるようになり取り組みがすすんだ一方で、行政のサポートを受けることの責任の重さを感じる、というお話しでした。

もうひとつのグループは福祉NPO法人におじゃましました。地域の高齢者の居場所をつくる活動です。学生たちは週二回行われているミニデイサービスの時にでかけ、一日ボランティアとして働き、その中で利用者の声を聞き、夜にはNPOの代表者からじっくり話を聞きました。「かしこい人のとなりにいても頭はよくなるけれどね、やさしい人のとなりにいるとやさしくなれるのよ」という話を聞いて、学生たちは感銘を受けました。

学生たちが学んでくるのは、地域づくりの現場にはそれを中心になってとりくむ人物の熱い意欲とたいへんな努力があるということです。私はそういう人をキーパーソンと呼び、その人がどういう志をもって取り組みをすすめているのかをよく聞いておいで、と聞き方のスキルも含めて指導します。訪問調査を通して、学生たちはそれらの人々の思いを引き継ぎ、自らの課題として考えはじめます。私は彼らの中から将来の地域づくりのキーパーソンがうまれることを期待しながら授業をすすめています。

1962年生まれ、高度経済成長のまっただなかの山口県のいなかで育つ。もともとは地球物理学が専門で地球の歴史における人類の時代の意味を考えるようになって環境学に参入した。日本は世界有数の資源国（生態系と水について）という認識のもとに持続可能な地域づくりに取り組む。ブログ「だいずせんせいの持続性学入門」(<http://blog.goo.ne.jp/daizusensei/>) を開設。

たかの まさお



非線形の泥沼から

津川光太郎 大学院多元数理科学研究科助教授

私の専門分野は“非線形偏微分方程式”です。非線形の話をする前に、先ず、微分方程式の紹介をしたいと思います。

微分とは“変化を表す量”です。例えば、物体の位置を表す関数の時間についての微分は速度です。速度の微分は加速度です。ニュートンは、加速度は物体にかかる力に比例し質量に反比例する事を発見し、運動方程式を導きました。一般的に、何らかの量がある法則に従って変化するとき、それを数式で表すと関数の微分を含んだ方程式（=微分方程式）になります。物理、化学はもちろん生物、経済など幅広い分野に微分方程式は現れます。通常、微分方程式の解は複雑な関数となり、我々の良く知っている関数（多項式、三角関数、指数関数）で書き表される事は稀です。よって、解を具体的に書き下す事はあきらめ、様々な解の性質を数学的に証明する事が目標となります。計算機によるシミュレーションなど応用的な研究も盛んですが、私は、理論的背景、その中でも最も基礎的な初期値問題の適切性を研究しています。適切性とは、解の存在、一意性と初期値に対する連続依存性を意味します。もし連続依存性が成り立たないと、初期値がほんの少し変わっただけで全く別の解に成ってしまいます。実際の実験や観測では必ず誤差が生じますから、同じ解を再現されるための非常に重要な条件です。

次に線形性について紹介します。線形の代表的な特徴は“重ね合わせの原理”です。つまり、方程式の解を定数倍したものや、解どうし足し合わ

せたものもまた解になる事です。線形の方程式に対しては古くから研究が有り、この原理を用いて美しい一般論が構築されています。しかし線形では記述出来ない現象も数多く存在します。例えば、フックの法則によると理想的なばねの復元力はその伸びに比例します。つまり、加える力を倍にするとばねの伸びも倍になり、これは線形現象です。しかし、現実のばねの場合には、厳密には比例しない事が分かります。これは線形では無い（=非線形）現象です。我々は物事を線形現象で近似してとらえる傾向が有りますが、良く考えると非線形の現象である事は身近にも数多く有ります。例えば、2倍の時間仕事をすれば2倍の結果が得られると期待してしまいがちですが、そう上手くは行きません。

線形では無いものをまとめて非線形と名付けます。ですから、それらを統一的に扱える一般論は期待できません。タイトルの「非線形の泥沼」とはW. F. エイムスが1960年代の本の中でその数学的取り扱いの難しさを表現した言葉で、その当時の非線形に対する印象を良く表していると思います。しかし、現在ではある程度一般的に取り扱えるような手法がいくつか開発されています。私は特に非線形の波動現象を記述する方程式に興味があり、この分野の最近の話題の一つは、時空フーリエ変換を用いた手法です。（大雑把な説明ですが）ステレオのグラフィックイコライザーの様に、波を周波数成分で表現する事をフーリエ変換と言います。フーリエ変換自体は約200年前に考え出された手法なのですが、それを利用して非線形の解の特徴を上手く捉える方法が最近編み出されたのです。これを用いて様々な非線形現象を数学的に明らかにする事、そしてその過程で新しい数学理論の構築に寄与する事が私の目標です。



セミナー風景（筆者中央）

FeedForth 2006: 大学院生主催の学際学会に向けて

FF06企画実行委員

名古屋大学で研究する大学院生たちにとって、多様な文化を持つ研究仲間や友人たちと知識や意見を分かち合い学び合うことは、最も価値ある経験のひとつとなっています。これは名古屋大学の国際的環境に支えられているものです。しかし、研究の中では特定の分野の研究者との交流が中心になり、学際的な交流の機会がなかなか持てません。学会でも多くは、論文発表や業績向上の必要に迫られる中でそれに終始してしまいがちで、真の知的交流の機会というのは、待っているだけでは与えられないものです。自身の研究分野に集中するだけでなく、一歩離れて、近くにいる友人たちの研究をながめてみることは、長期にわたって続く学術パートナーシップを築く貴重な機会となるに違いありません。

このような精神から、私たち大学院生たちはFeedForthを企画しました。FeedForthは名古屋大学の大学院生たちが自ら主催する国際学会で、多様な分野の研究者たちが自由な雰囲気の中で知的交流を持ちネットワークを築く機会を創造することを目的にしています。今年11月16、17日の2日間、キャンパスを会場に行ないます。

FF06を企画・実行する委員たちは8名で、出身、経歴や専門も様々ですがFF06の精神において一致し、自らの研究を進めながら、学会成功にむけて今年始めから準備を開始しています。自由な、上下関係のない環境の中で建設的な批判精神を持ち、発表を題材とした討論を充分に行ないながら、それぞれの発表の連携も生み出していける学会をめざしています。また、今後毎年続けていけるよう、工夫をしています。

私たち大学院生は、新進の研究者として、どんな研究を何のためにし、それは人類の課題とどうつながっているのか。そのような大きな視点から、具体的な研究内容とアプローチの紹介へ、そして多様な学術分野への貢献について、研究者が自分なりに考えたことを発表し、意見交換する場になりたいと思います。FF06によって学生たちが、多くの研究者個人や研究コミュニティと出会い、他の場では見つけられないような新たな発想や、パートナーシップを得ることを願っています。

FF06の成功は参加者のモチベーションにかかっています。参加者全体が積極的に参加できるような学会に向けて、学内外の支援を得ながら、企画実行委員たちの活動が続いています（FF06の詳細はホームページをご覧ください）。

Share what you do; create your own research community

Contact:

・ Visit our website at:

<http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/en/info/ff06.html>

・ For further inquiries please contact:

feedforth@ecis.nagoya-u.ac.jp



企画実行委員ら

FF06 企画実行委員

Matthew Pelowski (情報科学研究科 社会システム情報学専攻 M2、アメリカ合衆国出身)

Javier Gordon Ogembo (生命農学研究科 生物機構・機能科学専攻 D2、ケニア出身)

Joanne Ruth Dawson (理科学研究科 物理学科 M2、イギリス出身)

Diogo de Almeida Santos (法学研究科 M2、ブラジル出身)

Lucas Malta (情報科学研究科 メディア科学専攻 M2、ブラジル出身)

Natsuko Kudo (理科学研究科 物理学科 M2、日本出身)

Carlos Tercero Villagran (情報科学研究科 複雑系科学専攻 M2、グアテマラ出身)

Victor Montenegro Gonzalez (工学研究科 材料工学分野、エコトピア科学研究所 D3、チリ出身)

文学研究科が外部評価ピア・レビュー委員会を開催

大学院文学研究科は、7月28日（金）、外部評価ピア・レビュー委員会を開催しました。

同研究科を構成する19研究室のうち、平成13年度に6研究室、平成16年度に7研究室がこの外部評価を受け、今回は、各分野の専門家6名の評価委員により、日本文学、哲学、西洋古典学、東洋史学、考古学、ドイツ文学の6研究室を対象として、実施されました。

委員は、研究室が作成した「研究室スタッフ個人資料」、「研究室資料（研究室の歴史と教育研究方針・教育・研究）」を事前に受け取り、現状について十分な情報を持った上で委員会に出席しました。



当日、委員は、同研究科の教育・研究用諸施設及び各研究室を視察し、学部、大学院学生へのインタビューを行うなど、意見交換を行った後、名古屋市内のホテルに会場を移して、全体会議を行いました。

全体会議では、長崎外国語大学学長である池田紘一委員が委員長に選出され、池田委員長司会のもと、各評価委員から、担当研究室について全体的なコメントがありました。特に、予算縮小、伝統的学問の危機、と厳しい条件の中でも持続性のある教育・研究活動に取り組んでいる状況について、高い評価を受けました。続いて、各研究室のスタッフから、評価委員の指摘や提言に対し、具体的な学部学生に対する指導法、高度職業人の養成、今後の研究室としてどうあるべきか等の発言があり、活発な質疑応答が行われました。

なお、今回の評価は、報告書としてまとめ、公表する予定です。

文学研究科外部評価ピア・レビュー委員会委員

日本文学担当 宮地 正人 前国立歴史民族博物館長、元東京大学歴史編纂所所長
 哲学担当 伊藤 邦武 京都大学大学院文学研究科教授、現研究科長
 西洋古典学担当 中務 哲郎 京都大学大学院文学研究科教授
 東洋史学担当 礪波 護 大谷大学教授、京都大学名誉教授
 考古学担当 上原 真人 京都大学大学院文学研究科教授
 ドイツ文学担当 池田 紘一 長崎外国語大学学長、九州大学名誉教授

文学部が木浦大学校夏期日本語研修生を受け入れる

文学部は、7月23日（土）から8月10日（木）まで、韓国木浦大学校から夏期日本語研修生15名及び引率教授1名の計16名を受け入れました。

この研修生受入制度は、文学部と木浦大学校人文科学大学との間で、平成3年6月に締結された学術交流協定（平成11年5月に大学間協定となる）に基づく学生交流の一環として、平成4年から毎年実施されており、今回で15回目となります。

研修生は、7月25日から8月8日までの土・日を除く12日間、留学生センター主催の夏季集中日本語講座に参加し、

日本語の勉強をするとともに、休日には、本学の異文化交流サークル ACE の学生や木浦大学校からの留学生の協力を得て、京都旅行や豊田市での花火大会等へ出かけ、日本の歴史や文化に直接触れるとともに、学生同士の交流も深めることができました。

最終日には、成果報告会及び修了式が同学部大会議室で行われ、研修生が日本語で研修の成果を発表しました。短い研修期間にもかかわらず、研修生の日本語の上達ぶりには目を見張るものがありました。その後、町田文学部長から研修生一人一人に修了証書が手渡されました。続いて行われた歓送パーティには、研修生や引率教授、本学の関係教職員など約50名が参加し、研修生と ACE の学生による余興も披露され、楽しいひとときを過ごしました。



研修成果を発表する研修生



研修生の記念撮影

工学部で「テクノサイエンスセミナー」を開催

－体験学習：名大の機械工学－

工学部では、8月10日（木）、同学部2号館において、「テクノサイエンスセミナー」を開催しました。

このセミナーは、高校生を対象に、最先端の研究に触れ、実験を通して大学の研究者と交流する中で、科学技術の面白さを肌で感じ、工学に対して新たな興味を持ってもらうことを目的に、平成8年度から毎年テーマを変え開催しているもので、今年は、同学部機械・航空工学科の教員が「体験学習：名大の機械工学」をテーマに実施し、61名の高校生が参加しました。

参加者は、6つの班に分かれ、午前中は、機械工学にお

ける身近な話題から最先端の研究分野まで、“高校の授業”とは違う“大学の講義”を受け、午後は、午前中の講義に関連する実験を行いました。参加者は、担当教員や大学院生のアドバイスを受けながら実験に取り組み、工学の最先端で利用されている計測・加工技術等を体験することによって、機械工学を学ぶ面白さを体感しました。最後は、担当教員等との質疑応答が行われ、参加した高校生は、将来に対する大きな夢をふくらませつつ、セミナーを終了しました。



セミナーに参加した高校生達



実験風景「ミクロの目で材料の特性を解き明かす
～材料微細組織の観察～」

工学部が「テクノフロンティアセミナー」を開催

－触れてみよう、電子と情報の最先端に－

工学部は、8月8日（火）から10日（木）までの3日間、同学部電気電子・情報工学科の実験室等において、「テクノフロンティアセミナー」を開催しました。

このセミナーは、電気電子・情報分野の最先端の研究を直接体験し、工学の面白さを理解してもらうことによって、近年の若年層の理工系離れを少しでも解消することを目的に、毎年この時期に、高校生を対象に開催されているもので、今年は、東海地方を中心に17の高等学校から37名の高校生が参加しました。

参加者は、6つの実験課題の中から選んだ課題について、

同学科の教員や大学院学生のアドバイスのもと、うまくいったりいかなかったりしながらも熱心に実験に取り組み、最終日には、実験成果のデモンストレーションを行いました。また、9日（水）には、中部電力㈱名城変電所を見学しました。

参加した高校生は、教員、大学院生との交流や、大学施設の利用を通じて、大学生活を実感するとともに、電子・情報分野の最先端技術に触れることで、工学分野への興味を一層深めたようでした。



実験風景「極低温と超伝導の世界を操る～超伝導線への大電流通電～」



実験風景「ロボットの仕組みを理解する～書道ロボットを作ろう～」

「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」を開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、7月22日（土）の午後、名古屋市とその周辺に在住の小中学生とその保護者を対象に、「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」を開催しました。

この教室は、子供たちがDNAや細胞にふれる機会をつくり、その中から科学する心や、遺伝学・バイオサイエンスなどに対する関心を育ててもらおうという趣旨で行われているもので、今年で5回目になります。事前に新聞などで報道されたこともあり、多数の参加希望が寄せられましたが、その中から抽選などで選ばれた小中学生20名と保護者15名、あわせて35名が参加しました。



顕微鏡で観察する参加者



修了式の記念撮影

参加者は、遺伝やDNAに関する簡単な説明を受けた後、顕微鏡でタマネギの表皮細胞や根端細胞などを観察しました。実際に核や染色体を見るのは初めて、という参加者が大部分で、楽しそうに顕微鏡を覗いていました。その後、二人一組となり、大きな乳鉢を使って磨りつぶした液状のブロッコリーに、試薬を加え、DNAを抽出する実験を行いました。小一時間の作業の後、エタノールを注いだ試験管の中からDNAの白い繊維が現れると、あちらこちらで歓声が上がり、全員がDNAの抽出に成功して、実験は無事終了しました。

参加者からは、「日頃食べている野菜から沢山のDNAがとれたことに驚いた。」「本でみたDNAの形とは違うぞ。」等、思い思いの感想が聞かれました。

修了式では、杉田 護同施設教授より参加者ひとりひとりに、サイエンス教室修了証書と記念品が手渡されました。

遺伝子・再生医療センターがISOの認証をダブル取得

●医学部附属病院

医学部附属病院遺伝子・再生医療センターは、今年4月にISO9001:2000、6月にISO13485:2003の認証を取得しました。ISO認証のダブル取得は学内で初めてであり、大学等の公的先端医療研究開発機関でのISO13485:2003の認証は世界初となります。

現在、臨床に応用される細胞療法や再生医療の管理体制は、明確な法規制が確立されておらず、施設毎に設けられた倫理委員会等で審議対応しているため、その安全性や科学的妥当性の評価基準は標準化されていない状況にあります。

こうした現状を考慮し、同センターでは、吉田センター長を中心に、国際標準化機構（ISO）による国際規格の品質管理システムの導入を検討してきました。ISO認証の取得にあたっては、小島勢二同附属病院小児科教授を中心に設置された細胞調製施設で製造される臨床応用のための細胞や組織を、ISO9001にて管理することで、国際的水準の品質を保証し、さらには生物組織から得た細胞や組織をISO13485にて体内埋め込み型医療機器と同等の高いレベルで管理し、製品の安全性と有効性を保証する体制を目指しました。

本学で製造される臨床研究用製品の国際的な品質管理システムが構築されたことにより、日本におけるトランスレーショナルリサーチ（探索医療）分野における先端医療研究開発の牽引役としての本学の躍進が期待されます。

- * ISO9001:2000 品質管理・保証のための組織における品質管理体制を規定する国際規格。
- * ISO13485:2003 医療機器の組織における品質管理体制を規定する国際規格。医療機器特有の要求事項が含まれており、ISO9001:2000より厳格な規定です。



同センターに発行されたISO13485:2003の認証証

公開講演会「オーロラの科学 オーロラの発生の謎にせまる」を開催

●太陽地球環境研究所

太陽地球環境研究所は、7月30日(日)、名古屋市科学館サイエンスホールにおいて、市民向け公開講演会「オーロラの科学 オーロラの発生の謎にせまる」を開催しました。

この講演会は、本学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」と名古屋市科学館の共催で行われたもので、当日は6歳から90歳の非常に幅広い年齢層

から269名の参加がありました。

講演では、増田 智同研究所助教授が、オーロラの起源である太陽表面での活動現象について、三好由純同研究所助手が、オーロラの素となる加速された電子(プラズマ)が生成される磁気圏について解説しました。続いて、藤井同研究所長が、オーロラそのものについて、数々の画像・映像を交えて紹介し、最後に長濱智生同研究所助教授が、オーロラがもたらす地球環境への影響について、最新の研究計画および成果を交えて解説しました。

講演後に、安成哲三地球水循環研究センター教授の司会で行われた総合討論では、参加者から多数の質問があり、4名の講師との間で活発な議論が交わされました。

「太陽コロナの温度はなぜ高いのか?」「オーロラ粒子を加速するメカニズムは?」など、市民が抱く疑問の多くは、それぞれの研究分野に残された課題と一致し、研究者と市民の間で問題意識が共有されることによる、科学に対する共通理解の深まりが期待されました。

詳しくは、21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」ホームページ (<http://www.coe.env.nagoya-u.ac.jp/>) をご覧ください。



講演会の様子

六本木や秋葉原に「ドライミスト」を設置

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科が研究開発にたずさわった「ドライミスト」が、東京の六本木ヒルズに設置されました。

「ドライミスト」は、辻本 誠元本学同研究科教授(現東京理科大学教授)、奥宮正哉同研究科教授、原田昌幸同研究科助教授と、清水建設、能美防災らが、経済産業省の助成を受け共同開発し、昨年の愛・地球博(愛知万博)のグローバル・ループやオーストラリア館などで初めて実用化された冷却システムです。植物から水が空気中へ出ていく「蒸散」と呼ばれる現象を応用し、ノズルから噴霧された1000分の16ミリという微細な水滴が瞬時に気化する際に、

周囲の空気から熱を奪い、気温を2~3℃下げます。中部では、豊田市の上郷サービスエリア(SA)の休憩施設や、万博協会から設備を譲り受けた豊田市(豊田市駅近くの2カ所)や、安城市(安城産業文化公園「デンパーク」の2カ所)に、東京では、六本木ヒルズや秋葉原クロスフィールドに設置され、少ないエネルギーで涼しさを体感できる手段として注目されています。

原田助教授らは、六本木ヒルズを運営する森ビルの協力を得て、環境計測や利用者アンケートを実施し、「ドライミスト」の効果を調査しています。今回の調査を活かし、更なるシステム性能の向上と普及につなげたいとの考えです。

なお、六本木ヒルズのドライミストは、7月19日(水)から9月30日(土)まで設置されています。



都心に森の涼感。六本木ヒルズ構内の「ドライミスト」



六本木ヒルズ構内に設置されている紹介看板

キャリアガイダンスセミナーを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、7月21日（金）、同研究科オーデトリウムにおいて、キャリアガイダンスセミナーを開催しました。

現在、数多くの同研究科の修生が、国際開発・協力の第一線において活躍している中、単なる就職活動支援ではなく、長期的視点から見た国際開発・協力の仕事に携わるための心構えを提供する場としてのガイダンスを、院生会と同研究科が協同して企画し、多様な視点から学生自らのキャリアプランを考察し、可能性を広げる機会としました。

当日は、同研究科の学生に加え、大学院経済学研究科や近隣大学の学生約50名が参加しました。講師には、国連開

発計画からぎふNPOセンターに転進した市来 圭氏、世界銀行のシニアエコノミストであり排出権取引のコンサルタント会社の代表、またNPO理事としても活躍される坂入ゆり子氏、南アフリカ領事館勤務を経てアジア経済研究所に勤務している吉田栄一氏を招き、バラエティに富んだ内容になりました。市来氏は、「開発の現場・課題はアフリカや中南米などだけではなく身近な日本にも存在する。」と話し、坂入氏は、「自分自身の人生のオーナーであることが大切、世界銀行をキャリアのゴールと考えるな。」と学生を激励しました。吉田氏は、「実体験に基づく熱い思いと冷静な分析力を磨くことが大切。」と話し、参加者

は自ら動いていくこと、継続していくことの重要性に気づかされた様子でした。

今後は、ホームカミングデー開催当日（9月30日）に研究科修生によるガイダンス、1月には具体的な就職活動方法についてのセミナーを開催し、学生のキャリア支援に総合的に取り組んでいく予定です。



講師と熱心に質疑応答を行う参加者



セミナーの様子

公開講座「数学アゴラ」夏季集中コースを開催

●大学院多元数理科学研究科

大学院多元数理科学研究科は、8月10日（木）から12日（土）の3日間、公開講座「数学アゴラ」夏季集中コースを開催しました。

従来は高校生が対象でしたが、昨年からは一般高校の教員にも枠を拡げたことで、東海3県を中心に、高校生83名（スーパーサイエンスハイスクール事業の一環として参加した教育学部附属高等学校生29名を含む）、中学生1名、高校教員29名、計103名の参加がありました。

松本耕二同研究科教授による「素数の謎ーゼータ関数と

素数分布」、落合啓之同研究科教授による「アイの秘技」、永尾太郎同研究科助教授による「グラフと経路」の3講義が計8コマ行われたほか、在学生とのふれあいコーナーや、高校教員との教育改革をめぐる討論会を行う時間が設けられました。

映画化された小説、「博士の愛した数式」で有名になった“オイラーの公式”など、高等学校で学習している数学のみなさんに深い学問の世界が広がっていることを示す講義内容で、参加者は熱心に聴き入っていました。



素数の不思議を語る松本教授



熱心に耳を傾ける参加者

グランパスフラッグフットボール1日体験教室を開催

●総合保健体育科学センター

総合保健体育科学センターは、7月22日（土）16時から、本学東山キャンパス山の上総合運動場において、小学3年生から6年生を対象にした、フラッグフットボール1日体験教室を開催しました。

フラッグフットボールとは、野球で言うところの3角ベース、サッカーで言うところのフットサルに相当する、アメリカンフットボールを手軽になおかつ安全に楽しむためのニュースポーツです。

本教室は、社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）、株式会社名古屋グランパスエイトとの共催で、Jリーグが



フラッグフットボールを体験する参加者



記念撮影

サッカーを核に地域密着型のスポーツ文化の確立を目指す「百年構想」に基づき、スポーツ振興活動を積極的に推進している同チームと、地域子どもたちにアメリカンフットボールの基礎的な動きを手ほどきすることで、未来の部員を育てたい本学アメリカンフットボール部「グランパス」が同じチーム名という縁もあり、協力したことで実現したものです。

当日は天候にも恵まれ、50名以上の小学生が参加しました。事前に日本フラッグフットボール連盟の講習を受けたアメフト部員の、楽しく効果的な指導は、好評を得ました。

このような地域密着型のスポーツイベントの成功は、本学の学生にとっても、また地域住民にとっても有益であり、同センターは、今後も同様のイベントを開催していく予定です。

公開実験講座2006「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を開催

●生物機能開発利用研究センター

生物機能開発利用研究センターは、8月5日（土）、6日（日）の2日間、公開実験講座2006「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を開催しました。

今回の実験講座には、高校生、大学生、社会人の計14名が参加しました。「細胞の顔、糖鎖を見る」、「自分の遺伝子を見てみよう」、「DNAで見るメダカの地域差」と題し



電気泳動用のゲルを製作する受講者と指導をしているティーチングアシスタント

た3つのコースに分かれた受講生たちは、熱心に実験に取り組みました。マイクロピペットで試薬を加えたり、タンパク質を電気泳動したり、組織からDNAを抽出したり、遺伝子増幅装置で遺伝子を増幅させたりと、初めての実験に緊張しながらも、一生懸命取り組む姿が見られました。熱心に、講師やTAの人たちの説明に耳を傾ける受講生たちの姿が印象的でした。また、受講生からは、「有意義で刺激的な二日間でした。現代科学の一端を見ることができ、楽しかった。このような機会をもっとつくって欲しい。」という感想がありました。

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第3回講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



講演する田中教授

大学院生命農学研究科附属農場は、8月5日（土）、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の第3回を開催しました。

今回は、田中利治同研究科教授が、「昆虫を食う昆虫と昆虫に食われる昆虫」と題して、ガヤチョウの幼虫に寄生する寄生バチの巧妙な寄生の仕組みについて講演しました。昆虫には、人と同じように体内に侵入してきた異物を認識し、無毒化、排除するための免疫の仕組みがあります。寄生バチは、ガヤチョウの幼虫に産卵し、孵化した後は宿主中で栄養を摂取して成虫になります。講演では、昆虫に寄生する（昆虫を食う）昆虫が、寄生される（昆虫に食われる）昆虫の免疫をかいくぐって発育する仕組み、発育した幼虫が最終的に宿主から脱出する仕組みなどについて紹介しました。講演会には、30名ほどの参加があり、講演後には熱心な質疑が交わされました。

農業ふれあい教室「カイコを育て見る」を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



説明を聞く参加者

大学院生命農学研究科附属農場は、7月8日（土）と8月5日（土）の2日間、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、農業ふれあい教室「カイコを育て見る」を開催しました。今回は、小学生とその保護者など総勢36名が参加し、孵化したばかりのカイコの幼虫が繭を作って成虫（ガ）になるまでの飼育とその観察を通して、カイコの一生を学習しました。

第1回の7月8日（土）は、カイコの一生、カイコの育て方などについて説明したあと、孵化したばかりの小さなカイコの幼虫と、その餌である桑の葉を参加者に配布しました。参加者は、各家庭でカイコを飼育し、第2回の8月5日（土）に成虫になったカイコを持ち寄り、飼育した感想などについて話し合いました。参加者からは、日々目に見えて大きくなっていく幼虫を楽しみに観察した様子が報告されました。また、繭からの糸つむぎを体験するとともに、繭を使ったおもちゃ作りを楽しみました。

第47回東海・近畿地域大学附属農場協議会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



協議会の様子

第47回東海・近畿地域大学附属農場協議会が、7月27日（木）、28日（金）、本学を当番校として開催されました。協議会には、東海・近畿地域の12大学の附属農場から43名の教職員が参加しました。

1日目は、野依記念学术交流館において、「附属農場等技術職員の資質向上に役立つネットワークの整備と今後の運用」、「大学附属農場における食育関連事業・社会貢献事業の実施状況と今後の課題」などについて活発な意見交換が行われました。引き続き行われた技術職員による技術等発表講演会では、本学附属農場から田原保樹技術職員が「名古屋大学大学院生命農学研究科附属農場の露地畑栽培」と題して、学生実習、生産物販売、労働力などを総合的に考慮して実施している露地畑栽培の現状、日常的な栽培技術の工夫などについて講演しました。

2日目は、愛知県農業総合試験場と附属農場の見学会を実施し、参加者の交流を深めました。

第22回オープンレクチャーを開催

●附属図書館

附属図書館研究開発室は、7月24日(月)、同館5階多目的室において、第22回オープンレクチャーを開催しました。

これは、同室が掲げる図書館のハイブリッド化に関する研究開発及び学術情報流通についての今後の課題を主なテーマとして、平成14年度から学内外の方を対象に開催しているもので、22回目の今回は、寺井 仁同館研究開発室助



第22回オープンレクチャーの様子

手が、「ひらめき、発見、創造：洞察プロセスに関する認知科学的検討」と題して講演を行いました。

人は過去の経験などを基に効率的な問題解決を行っていること、また、一方で、それが先入観となり、単純な問題であるにもかかわらず解決が阻害されるケースがあることについての事例紹介とともに、問題解決に行き詰った状態から飛躍的に解決策が発見される洞察のプロセスについての実証的な研究の成果が紹介されました。洞察は「主観的に飛躍的だ」と感じられる一方で、その背後に漸進なプロセスが存在していることが、被験者の「眼球運動」を捉えることにより明らかにされたことが示されました。

講演ではさらに、“飛躍性”と“漸進性”という相反する特徴を持つ洞察のメカニズムについてのモデルベースにおける検討と、現在、寺井助手が取り組んでいる「情報探索行動から生まれる創造的発見のプロセスに関する研究」の紹介がありました。

講演終了後は、偏った情報探索に陥りがちな図書館のユーザーに対してどのような支援が可能か、といった点を中心に、活発な意見交換が行われるなど、充実したレクチャーとなりました。

博物館が第58回特別講演会を開催

博物館は、8月4日(金)、秩父宮記念スポーツ博物館主幹である三上孝道氏を招き、第56回特別講演会「愛知県ゆかりのアスリートとスポーツ秘話」を開催しました。

三上氏は、愛知県ゆかりのアスリートとして、愛知一中の校長として文武両道教育を実践し、スポーツ王国「愛知」の基礎を築いた日比野 寛氏、スポーツ墨絵の創始者で、その骨格標本が本学医学部に保管されている齋 辰雄氏、1932年のロサンゼルスオリンピックの100m 背泳の金メダリストで、IOC 副会長をつとめた清川正二氏、1936年のベルリンオリンピックの100m 平泳ぎの金メダリスト

の前畑秀子氏の4人をあげ、各人の人間性、アスリートとしての特徴と国際貢献、教育者あるいは芸術家としての側面などを、ユーモアを交えて講演しました。

今回の講演にあわせて、三上氏が持参した日比野 寛氏の掛け軸や著書を展示するため、「日比野 寛コーナー」が開設されました。このコーナーでは、日比野氏が昭和2年から昭和20年まで、本学医学部附属病院で毎年行っていたメディカルチェックの結果が綴じられた健康管理記録も、特別に展示されています。その中には、親交のあった第3代本学学長である勝沼精蔵元医学部教授との写真や、健康状態に関する勝沼教授らの所見、昭和20年の診断書作成に使われた肺と胃のレントゲン写真も残っています。これらは大学史的にも貴重な資料で、その一部がパネルとして展示されています。



講演する三上秩父宮記念スポーツ博物館主幹



「日々野 寛コーナー」の展示風景

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
1 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 揺銭樹の仏像	7.16 (日)	中日 (朝刊)
2 この国のみそ ナゴヤとトヨタ：トヨタの地元である本学の今春卒業生の就職実績は、1位トヨタ自動車、2位本学、3位名古屋、4位デンソー、5位愛知県で、トップ5をトヨタ系か公務員が占める	7.16 (日)	中日 (朝刊)
3 地域の防災まちづくりアドバイザーを養成する愛知県の講座が始まり、初日の16日には、福和伸夫・環境学研究科教授らが講演した	7.17 (月)	中日 (朝刊)
4 上村大輔・理学研究科教授らは、キノコから抽出される化合物に肥満を抑制する効果があることをマウス実験で実証 上村教授は、「肥満の予防、改善につながる化合物として期待できる」と話す	7.18 (火)	中日 (朝刊)
5 21世紀 COE シンポジウム「自然に学ぶものづくりの新展開」8月16、17日に野依記念学術交流館で開催	7.18 (火)	日刊工業
6 「名古屋大学九条の会発足一周年記念集会」21日開催	7.18 (火)	中日 (朝刊)
7 名大サロンの主役：高橋雅英・医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授 人為的には制御できない「遺伝子の不思議」	7.18 (火)	中日 (朝刊)
8 公開講演会「命の尊さに感謝し資源循環を考える」が16日に開催され、横田浩臣・本学名誉教授が命の尊さについて、「食卓を見れば、人間はほかの生物の命をもらって生きていることが分かる」と話した	7.18 (火)	中日 (朝刊)
9 時のおもり：池内了・本学名誉教授 「風景健忘症」に気づいて	7.18 (火)	中日 (朝刊)
10 国際的な「環境実務家」の養成を狙う大学院環境学研究科の教育プログラム「社会環境学教育カリキュラムの構築」が、魅力ある大学院教育イニシアティブに採択され、2年間で約5000万円の財政支援を受ける	7.18 (火)	中日 (夕刊)
11 海洋研究開発機構を中心に、紀伊半島沖の海底に地震計と水圧計を備えた観測点を4年間で20点設置することとなり、その間、本学と東北大学は、精度を約2倍にするのを目標に海底の衛星利用測位システム装置開発を進める 安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は、「震源域の海底の地殻は年間4～5cm変動する。精度が2～3cmになれば、短期間の動きも分かる」と話す	7.18 (火)	中日 (夕刊)
12 田中信夫・エコトピア科学研究所教授や平原佳織研究員らのグループは、カーボンナノチューブの炭素原子が六角形の状態で結合している「六員環」の観察に成功 田中教授は、「さまざまな炭素化合物を分子レベルで直接観察できるようになれば、薬品などが人間の細胞や神経にどのように作用しているかの解明につながる。化学だけでなく薬学や医学の研究にも大きな影響を与える」と話す	7.19 (水)	中日 (朝刊)
13 NPO 法人先端医療推進機構は、22日に野依記念学術交流館で先端学術賞授与式と記念講演会を開催	7.23 (日)	他3社
14 書籍：『図説「満州」都市物語』 西澤泰彦・環境学研究科助教授著	7.23 (日)	他3社
15 財団法人三井生命厚生事業団の「第39回医学研究助成」に濱田洋司・医学部助教授ら20件、「第15回医学研究特別助成」に尾崎紀夫・医学系研究科教授ら3件が採択される	7.21 (水)	中日 (朝刊)
16 研究スポット：大幸医療センターでは、葉酸の代謝にかかわる体質を調べる遺伝子型検査の外来を始めた 外来を担当する濱嶋信之・医学系研究科教授は、「メカニズムははっきりしていませんが、海外の研究ではTT型の母親で神経管閉鎖障害の子が生まれる割合が高くなっているという研究があります」と話す	7.20 (木)	毎日 (朝刊)
17 21日、本学と国民生活金融公庫名古屋支店は「産学連携の協力推進に関する覚書」を締結 同支店が取引先の中	7.22 (土)	読売
18 本学など4大学、中部電力など5企業が協力する、「知と技の探検講座」が21日開講 愛知県内の高校生を対象に、	7.25 (火)	他3社
19 若者 Eye：気合いを入れ、けいこに汗を流す鈴木博之さん・本学相撲部員	7.22 (土)	中日 (朝刊)
20 福井康雄・理学研究科教授の天体物理学研究室と名古屋市科学館、三重県四日市市博物館は、「宇宙100の謎」を募集する 研究者と市民が科学的好奇心を共有する試みで、審査員の一人、戸田山和久・情報科学研究科教授は、「税金で研究を支えている市民に科学への関心を深めてもらいたい。市民が知りたいこと、分かってほしいことに研究者が気づき、市民に分かりやすく伝えるための技術を磨くことにつなげたい」と期待を込める	7.22 (土)	中日 (朝刊)
21 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 荘厳具で豪華に飾り立てられた中国の古式金銅仏	7.23 (日)	中日 (朝刊)
22 三菱財団は2006年度の自然科学部門への助成先として、西山久雄・工学研究科教授の「高性能ピンサー型分子触媒の創成と有機合成研究」、吉田直紀・理学研究科助手の「高赤方偏移宇宙での銀河と銀河間物質の進化および大域的分布の理論的研究」など49件を選定	7.23 (日)	中日 (朝刊)
23 高校生のためのハイテクイベント『『パートナーロボットの開発秘話』の講演と大学・高専実験出前工房』8月18日開催 大学・高専実験出前工房では、本学など6校がさまざまなロボット技術を紹介する	7.24 (月)	日刊工業
24 総合保健体育科学センターとJリーグ、名古屋グランパスエイトの共催で22日、「フラッグフットボール一日体験教室」が総合運動場で開催され、小学生約50人が基礎ルールを習得したり、ミニゲームを楽しんだ	7.24 (月)	中日 (朝刊)
25 バーチャル技術を医療に応用：森健策・情報科学研究科助教授は、コンピューター断層撮影装置で撮った体の断面画像を組み合わせて、臓器の立体画像を作り出すシステムを開発 医学部附属病院で試験的に導入され、森助教授は、「実際にシステムを使った医師からの評価は高い。さらに応用範囲を広げ、普及させたい」と意気込む	7.23 (日)	読売
	7.24 (月)	中日 (朝刊)
	7.24 (月)	日経産業新聞

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
26 動き出す先端融合イノベーションセンター：日本ガイシや富士通、オリンパス、伊藤忠商事と共同で、工学と医学を融合し、病気の発症予防や早期治療につながる分析・診断法の開発を目指す 本多裕之・工学研究科教授は、家庭でも使える小型分析装置を開発し、「病気の診断は病院でしか受けられないという考えから脱却を図る」のが目標だと語る	7.25 (火)	日刊工業
27 24日、本学と伊藤忠商事は産学連携協定を締結 伊藤忠商事の持つ国内外のネットワークを活用して、本学の研究成果を発信する 平野真一総長は、「日本独特の商社機能を生かして、一歩進んだ連携協定にしていきたい」と話す	7.25 (火)	日刊工業 他3社
28 東山キャンパスに「ファミリーマート名古屋大学店」が開店 店内には、インターネットを無料で使えるパソコンが設置され、発表などに使うスクリーンを備えた「マルチスタディールーム」も開設 ファミリーマートの社員による講義や生の教材として店舗を利用するなど、産学連携にも繋げていく	7.25 (火)	読売 他2社
29 スポニチ健康道場目指せピンピン100歳：マクロビオティック 小谷明・物質科学国際研究センター助教授は、玄米に多く含まれるフェチン酸に「弱い抗がん作用があることは動物実験で確認されており、がん発症抑制には期待できるという印象です」と話す	7.25 (火)	スポーツニッポン
30 大学の特許料収入：2005年度に特許料収入があった大学83校のうち、1億9900万円で1位の本学は、赤崎勇・本学特別教授が取得した青色発光ダイオード関連の収入が大半を占める	7.26 (水)	読売
31 25日、大学院工学研究科にナノテクノロジーやプラズマ技術を研究開発する「プラズマナノ工学研究センター」を10月1日付けで設置すると発表	7.26 (水)	日刊工業
32 健康東海プラザ 特集・医療相談：石黒直樹・医学系研究科教授	7.26 (水)	読売
33 ひと・仕事：愛知医科大学理事長・加藤延夫・本学名誉教授 客観的事実を共有しなければ大学の発展はありえない	7.26 (水)	中日 (朝刊)
34 国際学術シンポジウム「日本の中国哲学思想研究…現状と展望」8月1日に文学部大会議室で開催	7.26 (水)	中日 (夕刊)
35 経済教室：加藤英明・経済学研究科教授、井上光太郎・名古屋市立大学助教授 市場に関するデータや研究を踏まえて議論を	7.28 (金)	日経 (朝刊)
36 駆ける：再生医療の産業化の旗振り役として全面に立つ上田実・医学系研究科教授	7.30 (日)	日経 (朝刊)
37 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 敦煌の交脚弥勒菩薩像	7.30 (日)	中日 (朝刊)
38 日本応用地質学会中部支部主催「夏休み親子体験ツアー」29日開催 足立守・博物館教授が講師となり、愛知県内の親子50人が化石探しを楽しんだ	7.30 (日)	中日 (朝刊)
39 迫る世紀の物理実験：丹羽公雄・理学研究科教授の開発した、原子核乾板を使った粒子検出技術が、ジュネーブの欧州合同原子核研究機関で進められる実験「OPERA」で活躍	7.31 (月)	日経 (朝刊)
40 「中世史研究会 2006年度総会・大会シンポジウム」9月2日開催 稲葉伸道・文学研究科教授らが語る	7.31 (月)	中日 (夕刊)
41 上村大輔・理学研究科教授が組織委員長を務める「第25回天然物化学国際会議・第5回生物多様性国際会議」が7月23日から6日間、京都で開催され、本学出身でノーベル賞候補に挙げられている中西香爾・米コロンビア大学教授と岸義人・米ハーバード大学教授がそろって参加、研究について講演した	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
42 文部科学省は、2006年度の産学連携型ナノテクノロジー・材料を中心とした融合新興分野の研究開発に関する研究開発課題に、本学などが参画する「還元的酸素分子の活性化に基づく新しい環境調和型物質転換」など3件を採択	8. 1 (火)	日刊工業
43 身近な活断層：鷲谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授 糸魚川―静岡構造線は、日本有数の活動的な断層系であり、これを境として日本列島の地質は東西に分けられる	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
44 半田市議の所属二会派が打ち出した市議全員の政務調査費廃止の方針に対し、小野耕二・法学研究科教授は、「議員が政治活動をするために経費は必要。問題に対する反省は必要だが、制度の廃止自体は理解できない」と首をひねる	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
45 「2006あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム 連続公開講座」が31日、野依記念学術交流館で始まる	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
46 ときめき時日記：尾関雄一朗さん・本学学生 「内々定」の連絡にホッとした	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
47 リンク：新田美貴子さん・本学大学院生 私のこだわりファッション	8. 1 (火)	中日 (朝刊)
48 國枝秀世・理学研究科附属南半球宇宙観測研究センター教授らのグループにより、「硬エックス線望遠鏡」が完成 今月中旬にブラジルの気球基地に運ばれ、10月下旬にも打ち上げられる予定	8. 1 (火)	中日 (夕刊)
49 1日、本学や京都大学などは共同で、国内最大となる直径3.8メートルの天体望遠鏡を岡山県浅口市の国立天文台岡山天体物理観測所の敷地内に建設することを発表 2011年の使用開始を目指す	8. 2 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
50 当世中部 若者事情―仕事と夢：2005年3月、本学を卒業する直前に資本金1円で会社を設立した野田亜弓・アイプレス社長の夢は、「女性の視点をもっと社会に生かす」ことだと、土日関係なく中部3県を駆け回る	8. 2 (水)	日経 (朝刊)
51 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 心優しい医学生が心配	8. 3 (木)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年7月16日～8月15日]

記事	年月日	新聞等名
52 阿草清滋・情報科学研究科教授らとの研究成果を基に、野村総合研究所はサイト構造を視覚的に把握できるようにしたツール「リデュアル」を開発 オープンソースで公開し、広く利用を促す	8. 3 (木)	日刊工業
53 原水爆禁止日本協議会系の世界大会が2日に開幕し、国際会議では、被爆者の沢田昭二・本学名誉教授が、イスラエルによるレバノン空爆に絡み、「多数の民間人が犠牲になっても米国はミサイル攻撃をやめさせない。イスラエルとイランの核問題に対する米国の態度の違いはあからさまな二重基準だ」と非難した	8. 3 (木)	中日 (朝刊)
54 文部科学省愛知県知的クラスター事業の一環で、堀勝・工学研究科教授が開発した研究を基に設立されたベンチャー企業NUエコ・エンジニアリングが、プラズマプロセス中のラジカルの粒子密度を計測できる装置を製造し、丸文が販売総代理店として8月中旬に販売を開始する	8. 4 (金)	日刊工業
55 大幸財団は、平成18年度の学術研究助成に渡邊豊英・情報科学研究科教授、山脇幸一・理学研究科教授、小保方潤一・遺伝子実験施設助教授、石田康行・エコトピア科学研究所助手などの研究6件を選出	8. 5 (土)	中日 (朝刊)
56 10月4日、愛知県経営者協会創立60周年記念事業として、岡部弘・デンソー会長や川口文夫・中部電力会長ら経営者と、本学など4大学の学生8人によるディスカッションが開催される	8. 5 (土)	読売
57 当世中部 若者事情一仕事と夢：本学発のベンチャー企業で、教授や講師などが社長を務める会社が21社あるのに対し、学生が社長の会社は、エコアクションニュース社を興した佐藤直樹さん・本学学生など2社のみ	8. 5 (土)	日経 (朝刊)
58 2006日本数学コンクール参加者募集 13日、本学や東京大学など全国5ヶ所で開催	8. 7 (月) 8.12 (土)	中日 (朝刊)
59 アンデスで星を追う：チリ・アタカマ高地には、本学のNANTEN2、国立天文台のASTE、欧州南天天文台のAPEX、米カリフォルニア工科大学のCBIという日米欧の電波望遠鏡のアンテナ4基が設置されている	8. 7 (月)	朝日 (夕刊)
60 7日、松田岩夫・科学技術政策担当大臣が本学を視察	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
61 家森信善・経済学研究科教授らの調査で、無借金経営指向が強いといわれる東海地域の企業は、借入金減らす方針の理由に「新しいチャンスに備えるため」という前向きな考えを基にしている傾向が強いと判明	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
62 スポーツと名古屋大学：東田和弘・博物館助手 全国で唯一の和式馬術部	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
63 「防災・減災フォーラム2006 in 愛知—水害から自らをどう守るのか」が7日に開催され、海津正倫・環境学研究科教授が「地形の形成史から見た水害」と題して講演、「濃尾平野は木曾三川が運んだ土砂が堆積してできた平野で、はんらんなどの水害が起きやすい」と指摘した	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
64 粒子線治療施設計画が愛知県内2ヶ所で同時進行 1つは名古屋市立大学が協力する名古屋市の計画、もう一つは、本学名誉教授2人が会長と役員を務める名古屋先進量子医療研究所 (アイナック) の計画で、平野真一総長が就任当初から必要性を訴えてきた構想を具体化、愛知県が支援を表明している 共に2010年完成を目指す、巨額の建設費に、県内に2つも作れるのかと危ぶむ声もある	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
65 「愛知県医師会健康教育講座」23日開催 「女性ホルモンに伴う健康問題—加齢でコレステロールと骨はどう変わる？」をテーマに、後藤節子・医学部保健学科教授が講演する	8. 8 (火) 8.15 (火)	中日 (朝刊) 読売 日経 (夕刊)
66 リそな銀行は、本学など中部圏5大学から11人の学生をインターンシップとして受け入れることを発表	8. 8 (火)	日経 (朝刊)
67 文部科学省は、平成18年度派遣型高度人材育成協同プランに、本学など国立大学8件、私立大学2件を選定	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
68 活写！：橋和希さん・本学大学院生 本学人力飛行機製作サークル「Air Craft」のメンバーと飛行機	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
69 リンク：丹羽亜衣さん・本学大学院生 私のこだわりファッション	8. 8 (火)	中日 (朝刊)
70 本学と京都大学の研究チームは、今夏から、日本に接近する台風の内部を高性能レーダーで地上から観測し、暴風雨をもたらす台風のメカニズム解明を目指す 研究チームの坪木和久・地球水循環研究センター助教授は、「台風に伴う暴風雨の構造を明らかにし、防災に役立てたい」と話す	8. 8 (火)	毎日 (夕刊)
71 本学など世界54機関が参加する、高エネルギー加速器研究機構の加速器「Bファクトリー」の実験グループは、B中間子がニュートリノを放出して他の粒子に変化する反応を世界で初めて観測 データ分析などを担当した飯嶋徹・理学研究科助教授は、「実験効率を上げてデータを増やし、荷電ヒッグス粒子の質量の範囲を絞っていくことが重要だ」と話す	8. 8 (火)	中日 (夕刊)
72 名古屋市は、2007年度中に制定する名古屋子ども条例の検討会を設置 検討会は、稲葉一将・法学研究科助教授ら6人で構成し、条例の基本的な考え方や盛り込む内容を検討、市に提言する	8. 9 (水)	中日 (朝刊)
73 アンデスで星を追う：本学の宿泊施設は、チリ・アタカマ高地の標高約4800メートルの場所に設置されている電波望遠鏡NANTEN2から車で1時間以上も山を下ったふもとの一軒家 福井康雄・理学研究科教授は、「滞在期間中の体調を維持するためにも、研究や生活をする住環境の整備は大事だ」と話し、水野亮・太陽地球環境研究所教授は、「長い人は2ヶ月滞在する。日本から、録画したテレビドラマを送ることもある」と話す	8. 9 (水)	朝日 (夕刊)
74 風向計：家森信善・経済学研究科教授 名古屋金利に潜むリスク	8.10 (木)	読売
75 未来につなぐ日本力：本学がトヨタ自動車などと企画し、7月に開講した社会人対象の「铸造講座」が人気 講座を主導する野村宏之・工学研究科教授は、「基礎的な原理と実践を同時に学べる機会は少ないだけに、うまく活用してほしい」と訴える	8.10 (木)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
76 第4回中央日本交流・連携サミットが2日に開催され、「中部のげんきを持続させるためには」をテーマに、科学技術交流財団理事長・松尾稔・本学名誉教授の司会によるパネルディスカッションなどが行われた	8.10 (木)	中日 (朝刊)
77 東海学生マンドリン連盟の合同練習が行われ、客演指揮者の作曲家・藤掛広幸さんの指導のもと、東海3県の7大学約120人が13日の演奏会へ向け入念に音合わせをした 連盟理事長の奥岡知樹さん・本学学生は、「活動を盛り上げようと演奏会にもう一度、藤掛さんの協力をお願いした」と話す	8.10 (木)	中日 (朝刊)
78 科学技術振興機構は、戦略的創造研究推進事業の2006年度第1期分の新規研究課題として、「単一磁束量子回路による再構成可能な低電力高性能プロセッサ」(代表者:高木直史・情報科学研究科教授)、「凝集反応系マルチスケールシミュレーションの研究開発」(代表者:長岡正隆・同研究科教授)など43件を採択	8.11 (金)	日刊工業
79 論点:リサイクル制度 武田邦彦・工学研究科教授 物持ちよくする社会に	8.11 (金)	読売
80 東海地方7月の地震:林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	8.11 (金)	読売
81 アンデスで星を追う:チリ・アタカマ高地に電波望遠鏡を置く本学グループは、10年間大小マゼラン雲を観測してきた 福井康雄・理学研究科教授は、「銀河のガスの中には星の誕生と死がある。膨大なデータが集まっておりさらに研究を進展させたい」と語る	8.11 (金)	朝日 (夕刊)
82 玉腰浩司・医学系研究科助教授、大塚礼さん・本学大学院生らの調査で、早食いをするとそれだけで肥満を招きやすいことが判明 豊嶋英明・同研究科教授は、「早食いのくせは若いうちに身につけているようだ。よくかんでゆっくり食べる習慣を、子どものころから身につけてほしい」と話す	8.13 (日)	朝日 (朝刊)
83 ほとけたちのイメージを探る:宮治昭・文学研究科教授 敦煌の天井装飾	8.13 (日)	中日 (朝刊)
84 2006日本数学コンクールが13日、経済学部で開催され、全国の中高生約280人が発想力を競った	8.15 (火)	中日 (朝刊)
85 本学理学部出身の世界的化学者で、ノーベル賞候補の一人とされる岸義人・ハーバード大学教授に学生時代の思い出を聞く:自分の興味を磨こう	8.15 (火)	中日 (朝刊)
86 平成18年度名古屋大学公開講座「あなたの見えない世界を探る」22日から10月10日まで全15回開催 文系、理系の各研究科の教員が順次登壇する	8.15 (火)	中日 (朝刊)
87 名古屋市と環境再生保全機構は、9月6日に開催する「2006年度ぜん息フォーラム」の受講者を募集 坂本龍雄・医学系研究科助教授の講演やパネルディスカッションなど	8.15 (火)	中日 (朝刊)
88 踊ろまい!第8回どまつり参加チーム:名古屋大学“怪踊乱舞”「移りゆく四季」をテーマに情緒あふれる世界を表現	8.15 (火)	中日 (朝刊)
89 学生街ダンス:竹沢邦泰さん・本学大学院生 「ワードウォッチング」で多くの「願い」と「約束」を集める	8.15 (火)	中日 (朝刊)
90 リンク:小林さやかさん・本学学生 わたしのこだわりファッション	8.15 (火)	中日 (朝刊)
91 小泉純一郎首相の靖国神社参拝 識者はこう見る:水田洋・本学名誉教授は、「外国から参拝に行くなど言われたからといって参拝をやめることはないと言っていたが、参拝に反対している国民の思いには応えておらず、無視している。参拝を批判されることに反発し、8月15日にしたのは、児戯にも等しい反応だ」と話す	8.15 (火)	中日 (夕刊)

2006年秋季特別展

「江戸時代の村と地域—美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害—」

附属図書館では、平成18年9月29日(金)から10月20日(金)まで、附属図書館4階展示室において、2006年秋季特別展を開催します。

同館に新たに寄贈された「日比家文書」などから、揖斐川中流域で頻発する水害や土石流災害と闘いながら暮らした村人たちと、山と川と水をめぐる“対立と共生のドラマ”を軸に、琵琶湖と伊勢湾を結ぶ幕末の大運河計画なども織りまぜながら、地域のあり方を考えます。

■講演会

日時：平成18年10月9日(月)
 時間：13時～15時30分
 場所：附属図書館5階多目的室
 講師：秋山 晶則(附属図書館助教授)
 「日比家文書による暮らしと災害」
 水本 邦彦(京都府立大学教授)
 「美濃路・伊勢道・近江道」

■展示資料解説

日時：平成18年10月11日(水)、14日(土)
 時間：各回13時30分～14時

主催：附属図書館、附属図書館研究開発室
 後援：愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市、大垣市、養老町の各教育委員会
 期間：平成18年9月29日(金)～10月20日(金)
 場所：附属図書館4階展示室
 時間：10時～17時(土・日も開館)
 入場料：無料
 問い合わせ先：附属図書館庶務掛 Tel.052-789-3667

名古屋大学附属図書館2006年秋季特別展 (地域貢献特別支援事業成果報告)

江戸時代の村と地域

新蔵史料—美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害—

揖斐川中流域で、頻発する水害や土石流災害と闘いながら暮らした村人たち。山と川と水をめぐるその対立と共生のドラマを軸に、琵琶湖と伊勢湾を結ぶ幕末の大運河計画なども織りまぜながら、地域のあり方を考えます。

伊吹山 中山道 大垣 養老 日比家 美濃 琵琶湖 伊勢湾

天野川 洪水との闘い 領主・地主・年貢 利水の苦闘 幻の運河計画

2006
 9.29(金) - 10.20(金)
 10:00～17:00(土日も開館)
 会場：名古屋大学中央図書館展示室

主催 名古屋大学附属図書館・研究開発室
 後援 愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市、大垣市、養老町の各教育委員会
 問合せ先：454-8601 名古屋大学千種区不昧町 名古屋大学附属図書館庶務掛
 Tel.0527893667 e-mail shomus@nui.nagoya-u.ac.jp http://www.nui.nagoya-u.ac.jp

●講演会：10月9日(月)13:00～15:30
 会場 名古屋大学中央図書館5階多目的室
 講師 秋山晶則(名古屋大学)「日比家文書にみる暮らしと災害」
 水本邦彦(京都府立大学)「美濃路・伊勢道・近江道」

●展示資料解説
 10月11日(水)、14日(土) 各回13:30～14:00

入場 無料

名古屋大学ホームカミング日を9月30日(土)に開催

Nagoya University Homecoming Day 2006

「宇宙から地球へ」

ホームカミングデーは、地域の皆さまと名古屋大学をつなぐ交流のステージ。
 緑あふれる広大なキャンパスでは、2001年にノーベル化学賞を受賞した野依良治特別教授のノーベル賞展示をはじめ、講演会・特別展・見学ツアーなど、興味深いイベントが目白押し。
 名古屋大学の活動状況を発信しています。
 皆さまお誘い合わせの上、お気軽にご来場ください。

第2回 名古屋大学ホームカミングデー

9/30 sat.

AM10:00~

会場 ■ 名古屋大学東山キャンパス(名古屋市千種区不老町)

※雨天決行



1 豊田講堂のイベント

MAP 3-D

ホールでのイベント

- 大学説明会 ■ 開会式
- テーマ講演

ロビー等での展示

- 駆け足でイベント一覧 ■ 「豊田講堂のあゆみ」特別展
- 日本人宇宙飛行士からのビデオメッセージ上映
- 宇宙飛行士宇宙実験用装置
- 宇宙飛行士地上訓練用装置 ■ 宇宙関連コレクション

豊田講堂イベント

- 附属農場生産物限定販売 ■ 生協による名大グッズ販売会

2 野依記念学術交流館

MAP 3-D

- テーマ展示 「宇宙から地球へ」
- 運動部同窓生と現役学生との交流会

3 野依記念物質科学研究館

MAP 2-D

- ノーベル賞展示

4 附属図書館

MAP 3-B

- 2006年秋季特別展 江戸時代の村と地域 -美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害-
- 図書館見学ツアー ■ オープン・ライブラリー

5 博物館

MAP 4-D

- 第9回名古屋大学博物館特別展 「スポーツと名古屋大学 する・みる・つくる」
- スポーツ科学連続講演会 「健康運動の科学 -中年からの健康づくり-

6 IB電子情報館

MAP 3-C

- さまざまな研究成果の展示

7 シンポジオン

MAP 3-D

- 豊田講堂のテーマ講演を同時中継
- シンポジオンのほか 経済学部カンファレンスホールでも行います。

8 情報連携基盤センター

MAP 3-C

- スーパーコンピュータ見学ツアー
- センター公開 ■ オープンラボ

9 高等総合研究館

MAP 3-F

- 高等研究院の研究・活動紹介

お問い合わせ

名古屋大学
 ホームカミングデー実行委員会(総務部総務課内)
 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
 TEL: 052-789-2012 FAX: 052-789-2019
 URL: <http://www.nagoya-u.ac.jp>
 E-mail: home-coming@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

主催 名古屋大学 共催 名古屋大学全学同窓会

プログラムの詳細は、ホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/home-coming-day/>) でご確認ください。

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月22日(水)～9月30日(土)

場 所：博物館展示室

時 間：10時～16時

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第9回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：スポーツと名古屋大学—する・みる・つくる—



9月19日(火)

場 所：環境総合館1階

レクチャーホール

時 間：17時30分～19時

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

第22回防災アカデミー

演 題：火山と共生する社会 - 富士山を例として -

講 師：小山真人 静岡大学教授

9月22日(金)

場 所：文系総合館7階

カンファレンスホール

時 間：14時～16時

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科

福田 真人教授 052-789-4792

国際言語文化研究科講演会

演 題：島村抱月の文学理論について

講 師：マッシミリアーノ・トマシ ウェスタン・ワシントン大学東洋語学部教授

9月23日(土)～24日(日)

場 所：奥飛騨温泉郷オートキャンプ場

時 間：9時～17時 (1泊2日)

対 象：小学3年生～中学3年生及び

その保護者

定 員：30名

参 加 費：5000円

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第4回地球教室 (親子対象フィールドセミナー)

9月30日(土)

場 所：博物館講義室

時 間：午前

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第62回特別講演会

演 題：健康運動の科学

講 師：島岡 清 総合保健体育科学センター教授

10月21日(土)

場 所：東郷町諸輪畑尻94

生命農学研究科附属農場

「農業館」

時 間：14時～16時

定 員：60名

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

生命農学研究科附属農場事務掛

0561-37-0210

地域貢献特別支援事業

「都市近郊の農業教育公園・講演会」

テ ー マ：ウイルスと昆虫の戦い

演 題：地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ

講 師：小林迪弘 生命農学研究科教授

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月24日(火)～12月23日(土)

場 所：博物館展示室

時 間：10時～16時

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第9回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：本に貼られた小さな美の世界－蔵書票－

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月26日(木)、27日(金)

場 所：国際開発研究科8F

多目的オーデトリウム、

留学生センター

時 間：10/26(木)

10周年記念シンポジウム

13時～17時

10/27(金)

同窓会発足記念イベント

10時～16時30分

入 場 料：無料

**名古屋大学短期留学受入れプログラム NUPACE 設立10周年記念
シンポジウムと交換留学関係者同窓会**

[問い合わせ先]

研究協力・国際部国際課

052-789-5733

10月27日(金)

場 所：IB 電子情報館

[問い合わせ先]

工学部・工学研究科

総務課庶務掛 052-789-3406

テクノ・フェア名大2006

内 容：工学研究科の研究者が保有する研究シーズを広く企業等の方に公開し、研究内容を理解いただくとともに、企業の方と共同で、新規産業の創出や新規製品の開発を目指すことにより、産学連携の芽を育むための企画です。

名大トピックス No.160 平成18年9月19日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

夏の終わりの青空を映す
高等総合研究館
(平成18年8月23日)



53 航空医学から宇宙医学へ

宇宙空間という未知の環境が宇宙飛行士の身体に及ぼす影響の解明は、スペースシャトルや宇宙ステーションなどの有人宇宙開発における最も重要な研究課題の一つです。こうした宇宙医学の基礎となったものに、高高度における高速飛行という、かつては未知であった環境における人体を研究する航空医学があります。

名大における航空医学研究の歴史は古く、名古屋帝国大学として創立された翌年の1940（昭和15）年には、医学部に航空医学二講座が開設され、1943年にはこれらが航空医学研究所（大学附置）として独立しました。時は太平洋戦争下、日本の財政は破綻寸前でしたが、航空戦力の増強が急務とされた当時、航空医学は軍部にとっても必要不可欠な学問だったのです。

敗戦後、日本の非軍事化を進めたGHQ / SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の指示により、航空医学研究所の廃止が決定されました。しかし渋沢元治総長は文部大臣

や大蔵大臣と直接交渉し、縮小改組のうえ、環境医学研究所として存続させることにかろうじて成功したのです。

その後、1960年に航空医学部門が復活し、1970年代後半からは、宇宙医学の研究に積極的に取り組むようになり、1991（平成3）年には附属施設として、宇宙医学実験センター（～2005年度）が設置されました。

1992年、環境医学研究所は、日本人初の宇宙飛行士、毛利衛さんが搭乗したスペースシャトル・エンデバー号を利用して、NASA（アメリカ航空宇宙局）などとの共同で鯉を用いた宇宙酔いの実験などを行いました。また、1994年に向井千秋さんが乗ったコロンビア号における、有名な金魚による実験も同研究所が参画したものです。

9月30日に「宇宙から地球へ」をテーマに開催される第2回ホームカミングデーでは、毛利さんや向井さんからのビデオメッセージ上映、毛利さんが環境医学研究所で実際に使った無重量実験装置の展示などを行います。



1	3
2	

- 45年ほど前の環境医学研究所。現在の理学部E館と環境総合館の間あたりにあった。1966（昭和41）年に現在の場所（野依記念学術交流館裏）へ移転した。
- 創設当時の航空医学研究所（看板）。当初は名古屋市東区西二葉町（現在は東区白壁、県立明和高校のキャンパス）にあったが、まもなく東山キャンパスに移転した。
- 準無重量実験装置。当時は日本で唯一の実験装置として知られ、毛利飛行士も本学を訪れた。